



「この明るくドライな音色に、たちまち魅せられました。この楽器を埋もれたままにしておくのはもったいない」。それは8年前。伝説の木琴奏者、平岡養一が残した愛器との出会いだった。

マリンバ奏者として活躍していた2005年、あるきっかけから、平岡が戦中に初演した「木琴協奏曲」をオーケストラと共演した。その時に平岡の遺族から譲り受けたのがこの楽器。長さ2.2尺、重さ130ポンド、4オクターブ半の音域を持つ立派なものだ。

「1965年に米国で作られたもので、樹齢1000年のホンジュラス産ローズウッドを使っています。今では良い材料が入手困難になり、こ

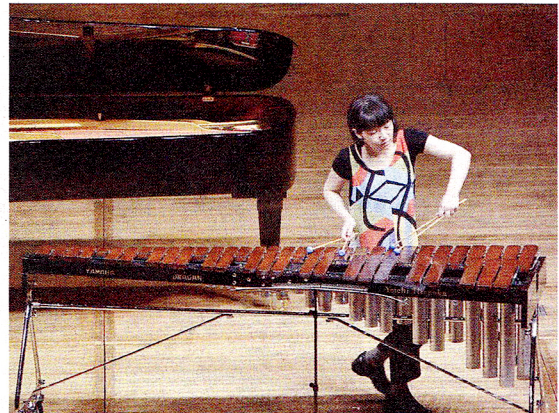
通崎睦美の 木琴

んなにすばらしい響きの楽器は作れないんです」

木琴が一大ブームだった戦前のアメリカで腕を磨き、戦後は日本で花形奏者として活躍した平岡は、「山寺の和尚さん」などの童謡編曲で知られる。だが、その原点はクラシック音楽。ベートーベンやモーツァルトを自らの編曲で盛んに演奏し、黛敏郎や伊福部昭ら有名作曲家に協奏曲を委嘱した。

実は10歳の時、平岡と「共演」したことがある。77年、平岡の音楽生活50周年を記念した全国ツアーの京都公演に出演し、モンティの「チャール

ダーシュ」を弾いた。途中から平岡が高音部を受け持ち、



伝説的奏者の愛器継承

▲ 平岡が愛用した木琴を演奏する
(10月19日、京都府立民ホール・アルティで) 中川忠明撮影

デュエットしたのだ。「まさか、その楽器が私の所に来るとは思いませんでした。運命的なものを感じます」

60年代以降、木琴は、形は似ているがより豊かで柔らかい響きを持つマリンバに、独奏打楽器の主役の座を譲った。「マリンバと木琴は別の楽器。木琴は響きが薄いつ分、演奏も難しいけれど、優れた楽器を使えば、驚くほど豊かな表現が可能です」

*近況 日本の木琴奏者の草分け、平岡養一の波乱万丈な生涯を描いた340ページの『木琴文庫』を、9月に講談社から出版した。「晩年、マリンバの時代を迎えても、『僕はマリンバだけは弾きません』と初志を貫いた平岡の姿勢に共感します」。平岡の愛器を使ったりサイタルシリーズ「木琴文庫」は今後も予定。

譲り受けた楽器を使って、10月に東京と地元・京都で「木琴文庫」と銘打ったリサイタルを開いた。メロディーを「線」でなく「点」のつながりで聴かせる、滑らかなトレモロは、聴く者を夢見心地にさせる。プログラムは平岡編曲のモーツァルトと現代作曲家の新作ほか。先人が残した遺産と新しい分野に挑むパオニア精神を体現した演奏だった。

一度は忘れられた楽器をよみがえらせようとする、その熱意は本物だ。「古い物に夢中になる性格なんです」。最近では肩書も「木琴・マリンバ奏者」。新たな「木琴時代」が幕を開けようとしている。



* 加藤祐治撮影

つうざき・むつみ 1967年、京都市生まれ。京都市立芸術大大学院修了。演奏家として活躍するほか、アンティーク着物のコレクションでも有名。著書にエッセー「天使突抜一丁目」など。